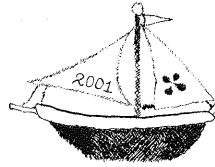
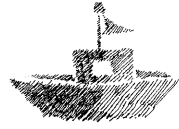


私が幼見教育を志した頃(21)

津守 真

世界に開かれた国に

一九五三年正月元旦は、私はカンザスシティ、パークヴィルで開かれた全米キリスト教学生会議で過ごした。前年の夏私はワシントンに行く前に、イリノイ州ジャクソンヴィルの世界キリスト教学生会議に参加して、人種国籍を超えた交わりがこれからの世界の基礎となることを若い学生たちと語り合ったことは記憶に新しかった。ところが今回は様子が違った。私共が到着してすぐに、一緒に行った黒人学生がパークヴィルのダウンタウンのレストランで中に入ることを拒否された。ミネソタでは身近に人種差別を体験したことはなかった私にはショックだった。黄色人種である私はど



うなのかと案じたが、私は無事に入れてくれた。この町では黒人はバスの座席も別で、差別は公然と認められた制度だった。ドイツ、インド、アフリカ、日本などから参加した外国人学生は異論を唱えて「葛藤する世界」という討論の分科会を作った。アメリカ人学生たちもそれに加わったが、会議全体としてはアメリカの人種差別に対する批判をまじめに論議しようとする空気は希薄だった。男の子は女の子を追廻し、女の子は男の子を追廻し、それが目的で会議に参加して、クリスチャンの信仰をどこかに置き忘れているように思われた。神学校の教授の基調講演も、アメリカの政策はキリスト教の正義の上に立っているというたぐいの、政治とキリスト教とを混同した考え方で、それには反感をすら覚えた。私は満たされない思いを抱いてビルグリムファウンデーションに帰った。

ビルグリムファウンデーションはミネアポリスの汽車の駅に近く、夜ベットに入ると汽車がシューッと蒸気を吐く音と汽笛が聞こえた。子どもの頃から私が聞いた懐かしい音だった。(現在では日本でもアメリカでもその音を聞くことはない。)暗闇の中で私はパークヴィル、カンザシシティで体験した、またジャクソンヴィル、イリノイで前年の夏に体験したアメリカのキリスト教の矛盾を考えた。アメリカのキリスト教はこの二つに代表される考えの間で戦っていた。イリノイの夏のキリスト教学生会議の合言葉は、だれにでも、豊かな愛の関心をもって隔てなく交わる (abundantly



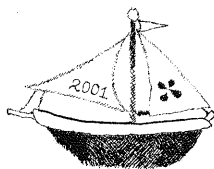
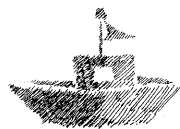
concerned with anybody)ということだった。今回のカンザスでは無関心が支配していた。私は、人は人種の別を問わずだれもが同等に人間として尊敬される価値を持つこと、人を見るときに何かカテゴリーにはめて見ると誤りを犯すことを身にしみて考えた。

こちこちと時計が時を刻んでいた。窓の下を自動車が通り始めた。ふと思えば、ああそうだ、ここはアメリカなのだ気がついた。尾道をでてから一年を超えた。

学問

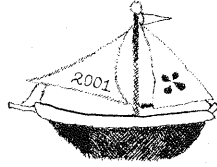
ミネソタ大学では、ときどき、内外の著名人の講演会が行われた。

一九五三年一月十五日午前十一時半より、マーガレット・ミードの全学合同講演会があった。ミードは著名な文化人類学者である。この日の講演題は「南太平洋と現代アメリカ」で、彼女は一九〇一年生れの五十一歳であるという自己紹介から始まった。彼女の文化人類学の最初の研究は一九二八年の博士論文「ニューギニアの幼児の研究」で、それから二十五年を経てこの年の六月に再び同じ場所に行こうとしていた。その間の変化を見ることに彼女は胸を膨らませていた。二十五年前にミードが用いた道具はたった一個のカメラであり、その資料は三〇〇枚の写真だった。これからとる資料はカラースライドと録音機、写機だと彼女は語った。二十五年前にはニューギニ



アに行くのに三十日かかったがいまは飛行機で二日である。(現代は数時間である。)
荷物は数カ月前に送らねばならず、一冊三ドルの本を飛行機で送るのに送料が五ドル
かかった。同様の変化がニューギニア自体に起こっている。原始的だった社会が白人
文明化し、教育は普及し、キリスト教が原始宗教に取り代わっている。この講演は研究
の結果の報告ではなくて、これから研究しようとしていることへの期待で、その興奮
が伝わってきた。「数百万人の人々が自分たちが欲しなかった変化に押し出されよう
としている。人種と国籍と文化とが世界中に交錯している。これまで何千年にもわ
たって生きてきたのとは違う世界に生きようとしている子どもたちにはあなたは何をす
ることができるか。」と彼女は講演を結んだ。(それから更に五十年を経た。マーガ
レット・ミードは一九七八年に死んだが、世界はより以上のスピードで変化しつつあ
り、私共は世界的変化のなかに投げ込まれている。

その晩午後七時より、大学学生会館のレイディースラウンジでフェルス児童研究所
長Dr.ヘザースの講演「人間発達の研究」があった。ミネソタ大学児童研究所のスタッ
フと学生も参加していた。フェルス児童研究所は当時アメリカで有名な石鹸会社の社
長サムエル・フェルスによって一九二九年にオハイオ州デイトンに設立された。彼は
全人としての人間の発達にかねてより興味を抱き、長期間にわたる幼児児童青年の縦
断研究を行うことをこの研究所の設立の条件とした。人類学、生物学、生理学、心理

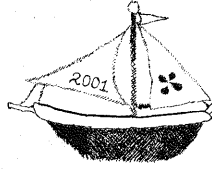


学等の専門研究者が参加し、ナースリースクールも保育所も付設されていた。毎年生れる子どもと両親を五名ずつボランティアで協力を求め、出生前より各分野の研究者が定期的に家庭訪問、面接、検査、観察を行うという興味深い研究プロジェクトだった。しかし、この日の講演はその縦断研究資料を生かしたものではなかった。専門分野間の連携がなく、機械的なデータの集積にとどまり、このユニークな研究の方法論も示されなかった。Dr. アンダーソンは、これでは資源の浪費ではないかと皮肉な質問をして座が白けたまま終わってしまった。ミネソタ大学児童研究所ではメアリー・シャーリーのきめこまかい縦断研究があった。それは生後三年間までの研究が出版されたが、シャーリーが早くに死んで縦断研究は中断した。その第三巻のパーソナリティー・デイヴァロップメントの質的記録は当時としては斬新だった。縦断研究は他にもカリフォルニアのナンシー・ベイリーなどの有名な研究があつてミネソタ大学では高く評価されていた。

私は生涯心にとどまったふたつの講演会に頭が熱せられたままビルグリムファウンデーションに帰った。この夜も外は吹雪が音をたてて走っていた。

ネルソン家

ビルグリムファウンデーションで約三カ月を過ごして後、大学の論文も一応完成さ

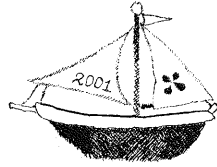


せたので、再び私はミネアポリスの家族を遍歴する生活に戻った。

一九五三年二月一日、私はフロイト・ネルソン氏の家に引越した。

櫻の並木と、緑の芝生の美しい住宅地にあった。ネルソン氏はミネアポリスの大きな弁護士会の弁護士で、心の底から実直で真面目な人だった。ミネソタ大学の法律学科を出てから、エール大学の法学の学位を持っていた。曲がったことが嫌いで、几帳面で、宗教心の厚い人である。教会に熱心で日曜学校の先生もしており、ミネソタ州コングリゲーションナル教会の平信徒代表をしていた。当時四十五歳で、スカンジナビア系の大柄な人である。一緒に住んでいた父親が冬の温暖かいフロリダに行つて留守なので、その部屋に私を泊めて下さった。ダブルベットが二つも入る大きな部屋で、書斎机や揺り椅子、テーブルやタイプライター、ラジオなど何でも揃っていた。

夫人のドロリス・ネルソンはよくしゃべり、快活でさっぱりした人だった。夫妻には子どもがいなかった。六年前にリチャードという男の子を里子にもらい、二年前にメアリアンという女の子をもらった。いずれも赤ん坊のときにもらったが、私が行ったときにはリチャードは六歳、メアリアンは三歳だった。ネルソン氏夫妻はふたりを目の中に入れても痛くないという程かわいがっていた。ネルソン家にはテレビがなかった。リチャードは友達の家にあるテレビが欲しかったが、ネルソン氏は頑としてテレ

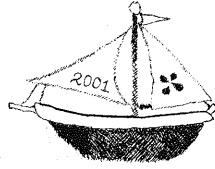


ビは買わず、アンテナだけを買ってきた。リチャードはそれで遊んでいたの、私は積み木と一緒にまぜて遊んだ。メアリアンはいつもお気に入りの毛布をかかえていた。朝起きてくるときも、夜寝るときもこの毛布を手放さなかった。私は彼女を毛布と一緒に膝に乗せて、日本の子どもたちによくしたように、「わたしが学校に行く道を歩いていると、猫さんに会いました。そうすると犬さんが来て、一緒に行こうと言いました。……」と身辺話をすると言をたてて笑った。彼女は片言でよくしゃべった。ネルソン夫妻は教会の会合でしばしば夜留守をした。そのときは私が子どもたちと夜を過ごした。

ネルソン家の朝食はいつも皆が揃って「主の祈り」から始まった。そしてネルソン氏と夫人と交互に聖書の一節を読んだ。(その日課は五十年間に何度かネルソン家を訪問したとき、いつも同じだった。私も台所のテーブルでの朝食でこの日課に加わると五十年間ずっとここに泊まっているような錯覚を起こした。)

日によってネルソン氏は電車で事務所に行った。そのときはネルソン氏はダウンタウンまで私と一緒にいき、私は乗り換えて大学まで行った。

ネルソン氏は毎晩六時になるとかならず家に帰った。ネルソン氏の車がクラクションを鳴らすと、子どもたちはドアの前に飛び出していった。ネルソン氏はまずリチャードの馬になり腹ばいになって部屋の中を歩き回るのが毎日だった。



私がネルソン家から次の家に移って二、三日たったとき、ネルソン夫人から電話をもらった。そのときの電話口の会話が面白かったので、私はメモをしておいた。

メアリアン「マコトはどこに行ったの？ 日本に帰ったの？」

夫人「まだ帰らないけれど、じきに日本に帰りますよ。」

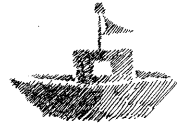
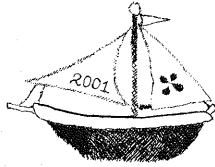
メアリアン「ママ、あたしが大きくなったらどこに行くか知ってる？ あたしは日本に行くの。」

夫人「そうしてどうするの？」

メアリアン「そうして結婚するの」

私共は電話口で大笑いした。同じ屋根の下で共に寝て食事をして一緒に遊ぶはずになかよしになってしまふのが幼児である。何十年もたってから後まで、ネルソン家を訪ねる度に私共はこの話をして笑いあった。

（それから五十年を経た。私はアメリカに立ち寄るたびにネルソン家の二階の同じ部屋に泊めていただく。ある時期、メアリアンの部屋になっていたその部屋には彼女の大きな写真が飾ってあった。メアリアンには四人の子どもがいる。そのうち二人は韓国の戦争孤児を引き取って養子にした。メアリアンの家はネルソン家のすぐ近くで、彼女の夫婦は毎週両親を訪ねる。彼女はパートタイムで病院の看護婦をしている。今年九十五歳になるネルソン氏は、私が米国留学中に泊めていただいた唯一の現存家族

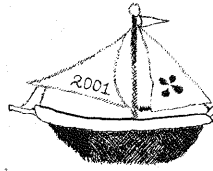


である。)

マイノリティの集会

ネルソン家に行つて間もなく、一九五三年二月七日には北川先生の日系アメリカ人コミュニティセンターで、日本人の戦争花嫁の集まりがあつた。当時相当数の日本人女性が占領軍の兵隊と結婚してアメリカに渡つていた。幸せに暮らしている人たちも、日本語で遠慮なく話せる場を求めている、北川先生はときどきその人たちと話すグループを作っていた。「津守くん、興味があつたら来て見ないか」と誘われて私が参加したその日は七組の戦争花嫁夫妻が出席していた。食習慣の違い、言語のこと、子どものこと、姑舅などの話など、日常のことが話題になつた。一世の人たちも出席していて、文化の根っこが切り離されたような中で、自分たちが生きる根本をどうやって見つけるか、真剣な話が続いた。ここには日本の中にだけいたのでは想像も及ばない苦心があつた。

同じ日午後四時から、ミネアポリスのダウンタウンの中心部にある高い尖塔をもつセントマルクス教会で、マイノリティの家族たちの礼拝が行われた。夫が黒人で妻が白人、妻が黒人で夫が白人のカップルが多かつたが、日系米国人も次いで多かつた。その他、ギリシヤ、ユダヤ、アルメニア、イタリア、中米、などの人たちと結婚した



米国人など、アメリカの社会からは疎外される階層の人たちが多勢集まり、大きな会堂が一杯だった。アメリカ人だけの集会とは違った落ち着きがあった。内に秘められた葛藤と愛情が集まった家族の姿に感じられて、何となしに涙が出てきた。この人たちこそ神の前に出るにふさわしい人たちではないかと私は思った。

台湾と中国

一九五三年二月十一日、台湾の蒋介石が中国本土を空襲した。その新聞記事を見て、私は冷たい戦争から熱い戦争へと変わりつつあるのではないかと恐れた。しかし日本からの手紙や雑誌にはそのようなことは何も述べられていなかった。外から見ていると、台湾や中国、韓国で起きていることは、日本で起きていることのように見える。「我が心、内に騒ぐ。神よ、汝何処にいまし給うや。」

数日後の夜、ネルソン家で、ファーストチャーチの日曜学校の先生たちの集まりがあった。日曜学校のことはそっちのけで原子爆弾に話は集中した。